識別番号　　Ｐ２４

研究課題　　米国 1970 年代社会・文化史的研究

研究代表者　アメリカ・カナダ研究所所長　飯野友幸（英文学科）

共同研究者　小塩和人（英語学科）　金山勉（新聞学科）　ジュリア・ライダ（英文学科）
北原妙子（東洋大学英米文学科准教授）

Summary　The production of space is a social, cultural, and political process. This new concept of space is an alternative to the previously taken-for-granted way of thinking of space as absolute. Through this understanding of space as socially produced, this project seeks to articulate the varieties of social spaces that were constructed in the realms of cultural production during the American 1970s, including literature, music, cinema, media, and advertising. By studying a limited time period and location, we hope to open up access to a broad range of social spaces that originated in that time and space. The spaces thus produced can lead us to a new way of conceiving the American 1970s.

１．本研究の目的及び背景

地理的言語を比喩的に使い、「・・・の地理」とか「・・・のマッピング」などと語る機会が多い。しかしながら、ある時代におけるある場所の「空間性」ができあがるのはこういった比喩表現を越え、社会的・文化的・政治的な要素が複雑に連係してのことである。それはあらかじめ決められ、固定されたものではありえない。近年、こういった文化研究的な空間形成についての理論は注目を集め、諸学問領域においてさかんに応用されている。そこでこの研究でも、具体的にアメリカの 1970 年代社会・文化のなかで、どのように空間というものが構築されてきたかに焦点をあて、研究していく。

一方、研究対象としてなぜ今 70 年代を扱うか、というと、この 10 年間は、60 年代という動乱と革命の時代と、80 年代のレーガノミックスの時代にはさまれた無個性の時代と言われてきたものの、実際にはさまざまな面で今日のアメリカ合衆国社会の原型がそのときに発生した、ということで英米では評価されはじめてきたからである。しかし、日本ではそれほど注目されてはいないので、その意味でもこの研究企画に取り組む意義は大きい。

２．研究の方法・内容と共同研究員の役割分担

具体的にこの研究を進める方法としては、放送メディアや広告といった空間性の社会学的な検討にくわえ、人文学的な領域、とりわけこれも最近の文化研究の成果を土台にして大衆文化（映画や音楽）の面からもアプローチすることで、「あいまいで捉えがたい 10 年間」といわれるアメリカの 1970 年代を幅広く分析していきたい。そして、文科省の科学研究費に応募する予定でもあり、受諾されれば、3 年間の長期研究とし、資料収集を行なうとともに、海外からもすでに交渉中の４人の協力者にも加わってもらう。さらに、それらの海外協力者は順次来日する予定で、研究会・講演をとおして、意見交換をし、研究内容を深める。

共同研究員の役割分担としては、小塩は広告、金山はテレビネットワークという社会的メディ

アについて、ライダと北原は映画、そして飯野は音楽というそれぞれの大衆文化の諸ジャンルを取り上げることにより、できるかぎり多角的にこの課題に取り組む。

詳述するなら、まず小塩はアメリカにおける飲料容器の生産について、プラスチック・パッケージングが登場したことに注目する。とくに容器が 1960 年代にガラスからポリラミネートされた紙カートンへ、1970 年代にポリプラスチック（HDPE）へと変容した過程を、広告というメディア空間のなかに見ていくことによって精査する。

また、金山は比較放送システム論の枠組みをもとに、1970 年代に入りデタントがさらに進む中、軍事的な衛星から転じて平和的な商業衛星利用がもたらした衛星による映像コンテンツ伝送ネットワーク時代の状況を分析する。とりわけ重要なのは、70 年代に衛星コミュニケーション技術の民間活用で、情報・エンターテインメントコンテンツへのアクセススピードが加速し、同時に、多チャンネルのコンテンツ選択が可能となった。この状況は、人々が大衆メディアを通じて全米横断的に結びついた 80 年代の Music Television(MTV)カルチャーへと発展するからである。

次に映画を取り上げる二人について。まず北原が扱う『ゴッドファーザー　Part II』(1974)においては、コルレオーネ「ファミリー」が築かれる様子を、二つの時間・空間を並行させて描くのが顕著な特色となっている。そこに描き出される意識、人生、家族が織りなす「空間」は、ヴェトナム戦争終結後のアメリカ社会でいかなる意味を持ったのか。ギャング映画であると同時に家族サーガでもあるこの映画で、境界のあいまいな「家族」という「空間」に着目し、考察する。

一方、ライダはトッド・ヘインズの監督作品『ヴェルヴェット・ゴールドマイン』(1988)を取り上げ、1970 年代初頭のグラム・ロック流行の時代がどのように描かれるかを検討する。映画の表象戦略として、幻想と現実のあいだの境界線が曖昧となるときに創造される特異な空間性を考察するとともに、「グラム」という概念が形成されるときのファンと演奏家とメディアにおける芸術性／商品性をめぐる空間にも注目する。

大衆文化のうちでも、音楽を取り上げる飯野は、アメリカ 70 年代の異色ロックバンド、スティーリー・ダンを考察対象とし、諸ジャンルの融合（ロックにジャズとブルースの要素が加わる）による音楽的スペースの多層化、そして歌詞における multicultural な言及のもたらす人種的スペースの多様化、という両面から、彼らの作り出すきわめてユニークな音楽を分析し、アメリカ社会・文化のコンテクストのうちに位置づける。

３．研究の成果

研究参加者全員が研究発表をし、学内外に広く公開しながら意見交換をし、その発表を論文にまとめ、最終的には研究書（英語）にまとめ、海外に発信する。また、コミュニティ・カレッジでの公開講座開講も視野に入れ、さらなる研究成果公開を図る。